

特別寄稿

情報化社会を考える

10年前くらいからインターネットが本格的に普及し、世界規模のインフラとなりました。そして現在、世の中は目まぐるしい変革のさなかにあり、コンピュータシステムや情報ネットワークなどのインフラがいかに枢要な機能を担っているかを如実に示しています。

ところで、コンピュータが扱う分野は大きく3つに分けることができます。

一つは自然に関することで、数式で記述され、決められた問題領域を漏れなく記述しております。したがって、問題の定式が十分で、かつそれを計算するソフトウェアが完全であれば、あとあと問題を起こすことはありません。

次に社会に関することで、規則で与えられます。しかし、この規則があらゆる場合に対応しているという保証はありませんし、規則全体で整合しているという保証もありません。絶えず修正を繰り返しているような場合には、特に怪しくなります。また、このシステムを処理するソフトウェアは巨大になりますので、こ

北大名誉教授 宮本 衛市

のソフトウェア自体が完全であるという保証もありません。

そして人間に関することは、数式でも規則でも記述することができません。と言うよりも、なぜ人間がそのようなことをできるのか、人間自身が説明できないからです。人間が分からないのですから、コンピュータに指示することができるわけがありません。しかし、コンピュータには膨大な処理能力とメモリがありますので、できるだけ多量の事例を与えて、その中から当面の問題に近い事例を検索して対応させようとしております。

現代社会は情報システムを電気、ガス、水道と同様なインフラとして成り立っていますので、その機能を十全に果たすことはもちろん、その機能が常時果たすことが要求されます。しかし、情報システムのダウンは必ず起こります。これはちょうど地震は必ずいつかは起こるというのに似ていますので、その時のための心構えや対策を講じておくことが肝要なのでしょう。

*ここに掲載しました宮本先生の記事は、去る12月10日の第19回談話会でのお話しの要約を、ご本人から投稿いただいたものです。なお、去る1月21日には第20回談話会において、松枝館長から「第23次(1981)日本南極観測夏隊参加の裏話」のお話がありました。

活動報告・他

『地図と鉱石の山の手博物館』訪問記

「第4回博物館におしかけよう会」が11月27日(土)に実施され、私達ボランティア7名が参加しました。

訪問先の『地図と鉱石の山の手博物館』は西区山の手にあり、館長は鈴木哲夫さん、北大総合博物館の元資料部研究員、土屋篁さんが名誉館長をしております。私達が訪問した際、鈴木館長に出迎えていただき、館内の説明をしていただきました。

当博物館は平成16年4月に鈴木館長が私費で設立した博物館で、展示してある鉱物は鈴木館長の私物の他、篤志家から提供のあった物で収蔵品は約2,000点、展示してある物はその中から約250

地学ボランティア 塚田則生

点だそうです。

博物館に入ってすぐテーブルがあり、その上には、紫外線を照射するとピンク色等に光る鉱物等や実体顕微鏡が置かれており、鈴木館長は「ここでは、鉱物を手で触れたり、顕微鏡で見たりすることができます。」と説明してくれました。

1階の展示は、日本・世界・北海道の鉱石・鉱物等のコーナーがあり、コンゴ産の孔雀石等の大きな鉱物が展示されています。また、「誕生石」のコーナーではダイヤモンドやエメラルド等の原石も展示されていました。道内で今は閉山となっている各鉱山の鉱石が沢山あり、なかでも、光竜鉱山(恵庭市)の金

鉱石や稲倉石鉱山(古平町)の菱マンガン鉱等が目を引きました。

地階には伊能忠敬のカラー地図(伊能図)等が展示されていますが、鈴木館長は「今取り組んでいることの一つが、北海道のアイヌ語地名の地図の作成であり、北海道の中のアイヌ語地名が風化する前にデータベースにしたい」と語っていました。



最後に鈴木館長は、「この博物館では子供たちが実験室の中にいるような感覚で鉱物を見て、自由に触ってもらいたいと思っています。」と熱く語っており、子供達の将来に期待する館長の思いが伝わり印象的でした。

午後2時から午後3時30分まで、短い間でしたが充実した見学会でした。

博物館の全景写真(左)と見学に先立ち鈴木館長から(左端)からの説明を受ける(下)



「クラーク博士像」の石柱台座

北大キャンパスのシンボルと言えば、クラーク博士誕生百年・北大創立五十周年記念クラーク像(大正15年5月14日建立、除幕。田嶋碩郎制作ブロンズ胸像)だが、残念なことにこれは戦時金属供出で昭和18年に献納により消滅。戦後、昭和23年10月に本道出身の彫刻家、加藤顕清制作・監修で復元されて甦った像である。つまり、大正15年(1926年)当時からの歴史的文化財としては、高さ約2メートル、幅66センチ方型”桜みかげ”(花崗岩)製の石柱台座の方にこそ”お宝”価値があるのではないかと。

デザインは正木直彦(東京美術学校長)で、「BOYS BE AMBITIOUS」の歴史的名言と共に、宮部金吾博士も協力したあのクラーク博士が愛してやまなかった紋章が、くっきりと石碑表面に彫り込まれている。

ヴィクトリア女王時代(1837 - 1901年)の英国ロンドンで話題になったのは、探検航海者たちが命がけで海外から運び、キュー王立植物園で大事に保存されてきた珍しい種子のひとつが発芽、1850年には開花していたこと。米国のアマースト大学を1848年に卒業したクラーク青年は、ドイツ留学への往路、この1850年の開花をキュー見学で目撃した。

図書ボランティア 久末進一



クラーク像の台座に彫刻された紋章(巨大睡蓮)にご注目

その植物は世界最大の直径約2メートルに及ぶ円形の巨大な葉を水面に広げ、それは畳2枚(約1坪)ほどで、見るものを圧倒した。白や紅の神秘的な花とつぼみに、クラークも息をのんだことだろう。何よりもその巨大な緑色の葉に彼は魅了されたはずである。それはスイレン科植物の珍種と言うよりは、まさに王様の風格を備えた生き物であった。それ以上に、生き物として自ら循環する植物の機能性とでも呼べる働きを、この巨大睡蓮は如実に実証しているのではないかと。

巨大な葉の緑色が濃いのは葉緑素のためで、これは太陽光線のエネルギーを摂取し、根からの水と空気中の炭酸ガスで同化作用を営み、“含水炭素”(炭水化物)が葉緑素(葉緑体)の中に発生する。この時、同時に酸素を生じて、これを空中に排出しているのである。のちにクラークの「植物生理学」という新分野の研究に結びつく開眼のヒントが、それを見た感動の一瞬にひらめいたかもしれない。

この植物こそが「睡蓮の女王」とも呼ばれ、女王の御名に値する「*Victoria regia* Lindl.(和名 オオニバス)」である。日本では「オニバス」(*Euryale ferox* Salisb.)と呼ばれていた近似種が存在していたことを、来日前にクラークが知っていたら驚いただろう。

17年後、1867年マサチューセッツ州立農科大学の学長になっていた彼の熱烈な嘆願に応じたナタン・ドルヒー博士の私財1万ドル寄付で、同大学内にキューをモデルにした「ドルヒー温室」が誕生。クラークの植物学者としての人生の拠点となるが、開拓使のお雇い外国人として、学長のまま札幌農学校教頭に赴任するのはその9年後、1876年(明治9年)のこと。彼の「植物生理学」は宮部金吾博士ら多くの人材によって発芽し、開花する。

石柱台座の紋章こそ「ヴィクトリア・レギア」である。彼は身をもって自身の歴史的名言を生きた人だったとそのシンボルは物語る一若き日の未知の発見と感動を終生持ち続け、知への情熱を失わない限り、ひとりの人生を超えて「大志」は永遠に生き続けるものだーと。

復元胸像にばかり目を奪われてはいけない。由緒ある石柱台座を再認識の上、博物館資料としても再評価できれば、屋外展示のビッグな教育文化財とし

「シベリア抑留」とはなんであったろうか？

昭和20年8月15日正午、豊原の散髪屋で髪を切り、来るべき戦闘に備える積りで行動していた。連隊本部からは、結局私は樺太南部にあった速射砲隊長に任命され、そこから北上して豊真(ほうしん)鉄道の峠駅宝台(たからだい)に陣取ることになった(満26歳)。この間に3組の日本側軍使がソ連側に射殺されたことも判った。私を囲んで30余名の将兵も最後の決意を固めた一刻であったが、私を見つめる20歳前後の兵士たちを見ると、もしや親ひとり子ひとりではないかと思われ胸がつまった。

すぐ北側の熊笹峠の戦闘ではソ連側の圧倒的艦砲射撃で死傷者続出。8月24日峠にとり残され突撃を覚悟した私たちも最終的には日ソ両軍将校の説得に応じ部隊本部に収容された。日ソ両軍3名ずつの代表将校の会見、日本側の1人は私であった。悔

て、クラーク像をもっと自慢できるはずなのだがー。

ちなみにクラーク胸像が金属供出で御国の為に“出征”した昭和18年、札幌市内から道民に馴染みの由緒深い記念物7基が一斉に消えた。それは北海道開拓史上の偉人たちの像であり、設置場所、人名、設置年代は次の通り。

【大通公園】 黒田清隆(明治36年8月) 永山武四郎(明治42年8月) 岩村通俊(昭和8年10月) 【中島公園】 大迫尚敏(明治40年4月) 【円山稲荷神社境内】 阿由葉宗三郎(昭和9年9月) 【円山公園公会堂内】 上田萬平(昭和3年6月) 【上水道浄水場】 橋本正治(昭和16年12月)。

『撃敵へ銅、胸像征く』と題して、当時の「北海道新聞」(昭和18年7月2日付け)は次のように報じている。

『一拓殖北海道の姿を象徴する由緒深き記念物として異彩を放っているが、米英撃滅のためには如何に歴史ある記念物でも効果的に運用することが、国民の士気を昂揚するものであり、戦争目的完遂にも協力することになるので、札幌市では一日の参事会席上、銅、胸像応召問題を議題に協議の結果、前記銅像等を自発的に供出することに決定、八日の奉戦日を期し、大通五丁目の聖恩碑前で盛大な供出式を挙行することになった。』

いかに戦時下とは云え、切羽詰まれば偉人の名譽も誇りもどうでも良くなった時代、迷惑したのはクラーク博士だけではなかったのである。(敬称略)

【参考図書】 「クラーク先生評伝」(逢坂信志著、昭和31年、財団法人クラーク記念会刊) 「北海道新聞」(昭和18年7月2日付け記事。札幌市文化資料室蔵)

一日本最後の樺太戦と私の場合ー (その1/2)

化石ボランテア 石橋七朗

しさと慙愧で涙止まらず、軍刀を差し出す私を、ソ連将校が逆になだめる妙な一幕もあった。

休む暇もなくすぐ戦場掃除、つまり屍体収容、負傷者後送、弾薬破碎など。だが深い谷底に落ちた屍体や武器など処理し切れるものでなかった。5人の屍体を現地に埋葬した辛い思いがなん十年経っても忘れられない。

続いて500名の作業兵を差し出すようソ連軍側から要求され、ここでも結局指揮官は私となった。再び徒歩行軍で熊笹峠を西へ。真岡港にでてみれば荒れ放題であり各所の死体片付けなど休む暇もなく、涙さえ流れずすべてが夢中であった。この時自殺せず生き残っていた真岡郵便局女性局員との出会いがあった。

ソ連側の一方的指示で山中にあった軍用糧秣を

貨物船に積み込まされ「東京ダモイ(帰国)」の騙しこ
とばで 500 名も乗船。数名のソ連監視兵に囲まれな
がら出港。たしか 28 日だったと思うが私は持参して
いた地図、コンパス、ラジオなどで船の進路や位置
を調べてみると沿海州の軍港ソフガワニに向かっ
ていた。不吉な予感を持ったが結局はその北のポルト
ワニノ港に着いた(現在、石狩市の姉妹港になっ
ている)。そこで驚いたことは大量のキャタピラ付き
ブル、ダンプカー、山積みの鉄道レールなどなど。それ
も米国・カナダ製であった。

記憶も薄れたが、私の抑留と軟禁されて移動させ
られた場所を別図にまとめてみた。他地方との連絡
も情報もなく、他の部隊がどうなっているかについ
ては 5 年間全く分からず仕舞いだった。帰国してか
ら分かったことは、シベリアはもちろんモスクワ近
くまで抑留者が運ばれたことだった。

つづく -

*訂正を御願います:ニュース 18 号、3 ページ左 4 行目
石橋さんの文中で、「鏡」としたのは「銃」の誤りでした。

沿海州全図およびムーリ地区図 (石橋さんの手書き図、コロナは収容所の意)

沿海州全図



ムーリ地区図



編集部から

* 去る 12 月 10 日には第 19 回、また 1 月 21 日には第 20 回談話会を開催しました。第 19 回では宮本先生の「情報化社会を考える」、第 20 回では松枝館長の「第 23 次(1981)日本南極観測夏隊参加の裏話」のお話がありました。それぞれのお話の後、忘年会、新年会を行いました。

* 「2010 年度第 2 回ボランティア講座 & 交流会」について

去る 2 月 6 日(日)に開催されました。13 時 ~ 15 時 講義・映像紹介・展示室案内、そして 15 時 ~ 16 時に交流会が博物館 2 階共同研究室 (その後、1 階「知の統合」へ) で藤田良治先生(当館助教・博物館情報科学)を講師として松枝先生・阿部先生が共に担当されているノーベル賞関連展示、藤田先生が数年前に担当された鈴木章先生へのインタビュー映像の制作、博物館における情報発信・映像アーカイブの意義と可能性についてのお話があり、映像が持つ魅力、おもしろさ、楽しさを紹介していただきました。20 名の参加でした。

* ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアをお待ちしています。

* ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac>

ボランティア・ニュース

編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、永山、沼田、安田)
発行日:2011 年 3 月 1 日
連絡先
〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
Tel: 011-706-4706